



Title	前栽の効力：『平中物語』を中心に
Author(s)	百井, 花
Citation	令和元（2019）年度学部学生による自主研究奨励事業 研究成果報告書. 2020
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/75955
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

2019年度大阪大学未来基金【住野勇財団】学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書

ふりがな氏名	ももい はな 百井 花	学部 学科	文学部人文学科	学年	1 年
ふりがな 共 同 研究者氏名		学部 学科		学年	年
					年
					年
アドバイザー教員 氏名	いいくら よういち 飯倉 洋一	所属	文学研究科		
研究課題名	前栽の効力 ―『平中物語』を中心に―				
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。(先行する研究を引用する場合は、「阪大生のためのアカデミックライティング入門」に従い、盗作剽窃にならないように引用部分を明示し文末に参考文献リストをつけること。)				
本研究は中古物語における前栽の作用・性質を明らかにしようと企図している。考察対象は『平中物語』以前の物語・和歌であるが、念のため平安時代中期までの主要作品は和文漢文、韻文散文を問わず調査した。9月頃に文献調査を終え、10月以降は国文学研究資料館を始めとする研究施設を利用しながら先行研究の確認、論の構築に集中した。12月に研究テーマを変更し、以下がその研究成果である。 はじめに 『平中物語』は平貞文（～九二三年）を主人公とした平安時代中期の歌物語である。伊勢物語の影響を大きく受けた作品であり、多くは色好みの恋愛譚により成る。 『平中物語』には植物にまつわる章段が多く存在し、主人公の平中は植栽を好んで行っていた様子うかがえる。本論では植栽を行う場―前栽―を舞台に展開されるドラマを基に、中古物語における前栽の作用・性質がどのようなものであったかを検討したい。 考察範囲は『平中物語』以前の物語・和歌とし、本文の引用は日本古典文学全集に拠る。 一、交流の契機となる前栽 平中は植栽を得意としており、花々のやりとりを通じて公私の人間関係を深めている。前栽をきっかけとする中らいについて採りあげたい。 ①御代を経て古りたる翁杖つきて花のありかを見るよしもがな ②たまぼこに君し来寄らば浅茅生にまじれる菊の香はまさりなむ (二一段) 平中が国経大納言への返事に美しい菊を結びつけて送ったところ、折り返し大納言から便りが届き(①)、その返事をする(②)章段である。直前の章段で上皇から美しい菊を献上するようにと命令されている点も踏まえて、平中の育てる菊は評判であったのだろう。見事な菊を贈られ、「何代もの帝に					

お仕えて年老いた翁ではありますが、杖をついてでもこれほど美しい菊の咲く仙境へ行ってみたいものですね」と大納言は菊慈童伝説を踏まえて詠んでいる。「いささかなること」の返事にさらに返事をしたのは思わぬ贈答に感動したからであろう。平中はそれに「道中にあなたが立ち寄ってくださるならば、雑草にまみえて咲く菊もいっそう美しく匂うことでしょう」と応えている。前栽が訪問の理由立てに一役買っているのである。

前栽を通して互いの訪問がなされていたことがわかる例を他にあげたい。

③わが宿の花見がてらにくる人は散りなむのちぞ恋ひしかるべき (古今集・春上歌・六七)

④年を経て花のたよりに事とはばいとゝあだなる名をや立なん (後撰集・春中・七八)

③の和歌は「我が家の桜を眺めるために訪れてくれる人たちを、私は桜が散ったあとに恋しく思うのでしよう」といった意味合いである。花の季節が終われば誰も来なくなることを「恋しく思うのでしよう」と言いながらも恨む様子はみえないので、前栽見物のために行き交うことが日常的な感覚として浸透していたか、前栽見物は相手宅へ訪問し仲を深めるための口実であることが共通認識として存在していたのであろう。恐らく後者ではなかろうか。

④の和歌では前栽見物が明らかに口実として利用されている。「何年も伺わずに今さら桜を見るついでと行って訪れたなら、ますます私は移り気だと評判になってしまうのでしょうか」としている。

既存の人間関係において交流の機会獲得のために用いられる前栽例を確認したところで、次に出会いの場としての前栽を考察したい。

⑤人のあきに庭さへ荒れて道もなくよもぎしげれる宿とやは見ぬ

⑥たがあきにあひて荒れたる宿ならむわれだに庭の草は生さじ (三六段)

平中が荒れた家を通りすがった際に荒廃の訳を尋ねたところ、家の女が和歌を詠み渡し(⑤)、その返歌をする(⑥)場面である。築地の崩れから女達が大勢いるのを覗けたので声をかけずにはいられなかったのであろう。「男に飽きられて、この秋は誰の訪れもないので庭までもが荒れ、草が生い茂って道もなくなりました。みじめな女の家だと思いませんか」という女の和歌に対し、平中は「誰に飽きられて荒れてしまった家なのでしょう。通りすがりの私でさえ、この有様を見過ごせないで、たびたび訪れて庭に草を生やさないでしようよ」と応えている。この章段では前栽の荒れようを不思議に思った平中がその理由を問いかけ、前栽を主眼に置いた歌の交換がなされている。

二、あだ心に見立てられる前栽

植物を和歌に詠み込むことは平安時代当時において主流であった。¹¹平中物語と編纂時期が近い歌集に古今和歌集と後撰和歌集があるが、前者には和歌全体の二九・五パーセント、後者には二二・三パーセントに植物が詠まれていたと知られる。単なる景物として植物を詠み込む和歌はもちろん、自分の心情や人の有様を植物に例えた和歌も多い。

前栽から人の様子を見立てた例をあげたい。

⑦穂に出ても風にさはぐか花薄いづれのかたになびきはてむと (十七段)

平中が女の浮気現場を見かけ、女に和歌を詠み渡す章段である。「風が吹けばなびく花薄のように、

人目に付くまで騒ぐのでしょうか。どちらの男になびこうかと」と詠まれている。間男が前栽の薄に隠れていた点を踏まえ、女を花薄に見立てている。

⑧あらはなることあらがふな桜花春をかぎりと散るは見えつつ (三十四段)

⑦と同じく、平中が女の浮気現場を見かけて和歌を詠みかける章段である。こちらも女を前栽の桜に見立て、意味は「はっきり分かっていることを言い訳しないでください。桜が春はもうおしまいだと散るように、あなたの心が移ろうのをこの目で見たのですから」としている。

両段とも相手を前栽に例え、浮気をとがめている。前栽管理において実際的な世話はともかく、植物の品種選択など造庭の方向性は主人が決めていたと考えられる。前栽は管理者の個性や人柄が表れる場でもあった。前栽とその管理者との強い結びつきが意識されているからこそ、前栽が引き合いに出されるのであろう。

参考までに、植栽に主人の意向がうかがえる例をあげたい。

⑨宿もせに植ゑなめつゝぞわれはみる招く尾花に人とまるやと (伊勢集・二四一)

「宿も狭くなるほどに薄を植え並べながら見えています。招く薄を招く袖と見てあなたが立ち止まってくたさるのではないかと」と詠まれている。

三、心に寄り添う前栽

前栽は物思いをする心への慰みともなる。

⑩たすくべき草木ならねどあはれとぞもの思ふ人の目には見えける (二十五段)

平中が手紙を送っても女は受け取らないので傷心し、和歌を口ずさむ章段である。やるせないもの悲しさを誰かに聞かせるでもなく前栽に向けている。和歌は「私の憂いを助けてくれる草木ではありませんが、物思いをする私にはしみじみと感じられるのです」といった意味合いである。

前栽を心の慰めに行っている例を他にあげたい。

⑪ひとりしていかにせましとわびつればそよとも前の萩ぞ答ふる (大和物語 一四八段)

女が遠く離れた男を思いやって詠んだ和歌で、「ひとりでどうしようと心細くいますと、前栽の萩だけがそよそよと吹く風に揺れて、そうですよ、と答えてくれるのです」としている。この歌も誰かに詠みかけたものではなく、ひとりごとである。

両歌とも前栽に主眼を置いて、物思いの寂しさを詠んでいる。前栽を自分の心に寄り添う理解者として位置づけているのであろう。

おわりに

以上、『平中物語』を中心に前栽のあり方について私見を述べた。本稿の一部を振り返りながら、今後の展望をあげたい。前栽は「一、交流の契機となる前栽」で見たように、社会的交流が生まれる場であった。前栽を理由に訪問の約束をしたり、前栽の手入れ具合でそこに住まう女性の恋愛事情がう

かがえるなど、当時の男女において前栽は重要な存在だったと思われる。男女における前栽の効能はさらに視野を広げ改めて掘り下げたい。また「二、あだ心に見立てられる前栽」の通り、前栽は造庭の段階から管理者の趣味や意向を反映しており、前栽から得られる情報量が多いので、いわばその人自身を表すものとして周囲から扱われていたのではなかろうか。この点については今後、ただ植物に見立てられている場合とその人が管理する前栽に見立てられている場合とで更なる検討を行わねばならない。それとは対照に「三、心に寄り添う前栽」では管理者の視点から前栽がその人の外部に存在することを確認した。自身と一体というよりは、あくまで寄り添ってくれるものなのであろう。本研究を通して他者と自己における前栽認識の異同が気になったが、それは今後の課題としたい。

ⁱ 菊の露を飲み、不老不死となった侍童。菊の咲き乱れる山奥の仙境に住まう。

ⁱⁱ 古今和歌集（九〇五年） 後撰和歌集（九五七～九五九年）

七海絵里香、森崎翔太、大澤啓志「万葉集および平安期の勅撰和歌集にみる植物に対する行為」（『日本緑化工学会誌』第三九巻第一号 平成二五年）